

「戦争と平和」と「人間革命」

ロシアとウクライナの戦争の終息が見えてきません。突然のロシアの侵攻から、世間の目はこの国の人々や文化まで敬遠する風潮も一部に見られるように思われます。そんな6月、私は世界文学紀行講座の一環としてロシア文学を取り上げました。

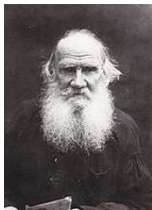
“なぜ今ロシア？”との見方もありましたが、“いや、こんな時だからこそ世界的に知られている「戦争と平和」について学び直してみるのも意義あること”と思ったからです。かつて私自身、作品の舞台のサンクトペテルブルクとモスクワ、そしてトルストイの生家のあるヤースヤナ・ポリャーナを訪ねていたという経過もありました。

今回その長編をもう一度読み直しながら、著者が「戦争」について綴っている部分の一端を取り上げました。150年あまり前に起きたフランス（ナポレオン軍）のロシア侵攻の歴史を軸に描いた大河小説のほんの一部だけですが、現今の



政治の中心クレムリン

ロシアのウクライナ侵攻にも通じていると思われるのでここにご紹介する次第です。



<引用は集英社版『世界文学全集』の『戦争と平和』（原久一郎訳）から。物語の流れから一部、前後が変わっている項目もあります>

- ▶ 朝日を浴びて銃剣はきらめき、砲煙はゆらぎ、さっきまであんなに美しく楽しげに見えていた戦場の空には、今や湿気と煙が靄（もや）のように一面にひろがって、変に酸っぱい火薬と血のにおいがこもっていた。
- ▶ 食もとらず休息もせず、疲労困憊の極に達した両軍の兵は、同じように、まだ殺し合っていないなければならないのだろうか？という疑念を抱きはじめた。一同の顔は動揺を表し、すべての者の心に『何のために、だれのために、われわれは殺したり殺されたりしなければならないのか？・・・殺したいやつは勝手に殺しに行くがいい、したいことをするがいい、しかし、おれはもうこれ以上ご免だ！』というような懷疑が湧きおこった。
- ▶ やがて黒雲が集まりだし、死骸や負傷者の上、怯えた者や疲れはてた者やためらっている者の上に、小雨がしとしと降りはじめた。「おい人間ども、もうたくさんだ、たくさんだ！やめてくれ・・・いい加減正気に返ったらどうだ！お前たちは一体何をしているのだ？」こう言っているかのようであった。
(著者の強い思いの発露ではないでしょうか)
- ▶ ところで、戦争とはいったい何だ？・・・戦争の目的は殺戮だ。軍人社会の習慣とは・・・人間をもっとも多く殺した者がもっとも立派な褒賞にあずかるんだからね。殺戮した敵の数が多ければ多いほど、彼らの功績は甚大だと自負して・・・。
- ▶ 「・・・おれが目標なのかしらん？ おれのほうへ駆けてくるのだろうか？ 何のた

めだろう？ おれを殺しにか？ おれを、みんなから熱愛されているこのおれを？」
(ある将校の言葉です)

➤ (物語の主人公の一人アンドレイが戦場に倒れたときの叙述です)

ただ彼の上には高い空——晴れてこそいないが、高い空と悠々と過ぎゆく灰色の雲があるばかりであった。

「なんという静かな、平和な、崇高なことだろう・・・」
(戦争の悲惨と戦場の喧騒に対して、見上げた空のなんと高く悠久なことか。空を見上げているなかで、現実の世界も見下ろせるような境涯にもなっていくことが感じられてきます)



邸の森にあるトルストイの質素な墓です

ここで「戦争と平和」に合わせて私の愛読書・小説『人間革命』第一巻の冒頭の一節を紹介させていただきます。

戦争ほど、残酷なものはない。

戦争ほど、悲惨なものはない。

だが、その戦争はまだ、続いていた。

愚かな指導者たちに、率いられた国民もまた、まことに哀れである。

気鋭のジャーナリスト・佐藤優氏は近著「プーチンの野望」の「はじめに」の文の中でこの一節を引用しています。外交官としてモスクワにある日本大使館に 1987～95 年の間勤務、北方領土問題など日本政府要人の通訳も務めてきた氏は、ロシアの歴史から日露の関係などについて分析しながら現今のウクライナ問題について解説、本の最終部分では、池田大作 SGI (創価学会インタナショナル) 会長とミハイル・ズグロフスキー博士 (国立キエフ工科大学総長=当時) 対談の内容に触れながら「平和のための『闘う言論』を」と世界に対話を広げること強調しています。

平和ほど、尊きものはない。

平和ほど、幸福なものはない。

平和こそ、人類の進むべき、根本の第一歩であらねばならない。

(小説「新・人間革命」第一巻より)



続編「新・人間革命」を併せて 40 巻あまりになる著作では、人間の生き方から生命論、平和論なども展開されており、まさにトルストイの「戦争と平和」に通ずる大河小説だと私は思っています。

「一人の人間における偉大なる人間革命は、やがて一国の宿命転換をも成し遂げ、さらに全人類の宿命の転換をも可能にする」との小説のテーマも、平和な世界を築く究極の方途だと思います。今の地球を覆っている危機に解決への光を注ぐであろうとの思いから二つの作品をご紹介した次第です。

